



諧謔

檜木がし

全

中村俊定文庫  
文庫 18  
189



鳴澤水煙新と九世戸乃松原長十  
少通姑六種十辨と里と強くの強弱の  
凡そ一國と一十邑八領の西と東  
羅綺の色通昭寺の翠簾北海子  
菊清しむ或は十二回縁心裏空と  
有難例一も三つと女今錦と夢  
清くのみつと心と強と色と強と  
寺と心と強と女思と子と願と上と下

れと味増はみとくはれと下は品と  
同くは口派因舌を流しとす一は辨と  
濁り谷川の未はうとん奥一の中頃  
芭蕉翁右女子の穂便に正月と聞  
玉如くはとくくとくくとくくとく  
たあくとくと寂すとわくとくいとく  
そのれくとくと神は年既尊と下と十  
と回と過と終と金鼓と女とあると

乞爾先早々公の本等々存故人懐  
色の三義笠杖ぬり至松朋月曉  
乃星林照る公

昔享得丙午良月十二日

十指凡合

大練舎 蓬所 枕翁



不誓  
み也、菜 蘿 苜 前を雨相い一味子ふふ心ん

追福



懐紙すく菊の香あそ位牌陰 露沾

應鐘

盃一 指へしと海子霰う如 万水堂 龜角

木葉 笠

貫水や日向木の葉も下梨 盤筑  
木曾殿よ後口活免と木の葉掃 吟市  
義仲孝の言の葉 枯柏 青葉  
時句は云々 己笠 木曾湯 秀翠



口切や堀の底を穿つに  
茶葉を煮て茶を一人に  
三十二周の多油を味す

口切や相合茶もろ如呼

沾雷

此茶を煮たれり

玄妙な事一茶の味は  
多層あり

思ふ出—玄妙—見出—皆時由

越長  
和宴

追薦

其の茶や伏くも居るも其丹  
多きふもや日向口も切極

立圃  
沾梅

追福

南無木葉嘘以はくや書流

白峰

六十七百余巻の印度の茶葉  
三十三回のみ向茶  
只存のさふりつたなり

多羅葉乃番の至時あるに此  
嘘志たる笠の木の葉も茶の味  
その味や其角の茶は下へ  
あるものも思はれ十月張ぬを  
此の道は十束もみり十二日

當國  
今更  
風女  
千本  
葉二

追薦

尚書夏雲津ノル義仲寺一清也  
意ハ乃古墳ノ木桶ニ在リ

我の〜九時白く病の瘰癧  
家も〜不為給小日の田極笠  
月さるる名や木曾教如袖降

雨播  
略洗  
秋風

義仲の墓本所の此の所  
〜

武の文の乞も留し〜

雨播

追薦

名の〜維王母、松子〜

不知

追薦

名も物もや〜名は〜  
孝節推〜性業〜  
入相を文持ものや〜  
橘乃霜を除るや〜  
志〜二十日〜  
木葉の松〜小舟浮堂  
夕衡一瓦は〜  
鶴崎班子旭を〜小春うら

啓史  
文岳  
南強  
雲腴  
標梅  
緒松  
一空  
南花

追福

ほろろ〜し〜月夜の響く初めの  
大津笠中指ある十、舟の  
志久経自既縁産生縁芽子  
海川や舟の四十里、云あり五  
神のよれ木の葉の首あり世の  
〜ふれあむ〜し〜一舟〜竿の笠  
一旌の朝の細豆ね乃月  
ハ五才笠のむ〜し〜吹〜く続

紀逸  
琴松  
壺竜  
文綸  
卷石  
東風  
東巴  
雪求

石との撞よ〜し〜を本條に  
字は〜し〜鐘のよ〜寒〜し〜笠塚  
袖笠や風は吊よ〜花の飾  
い〜し〜聖人〜し〜ありあの笠  
飾れ〜し〜富士の位〜し〜る香燈  
知れ〜し〜音も音せ〜し〜ひのこ笠  
も〜し〜るむ〜し〜し〜散笠  
高〜し〜る母の音〜し〜るありあの笠  
飾れ〜し〜る雪の音〜し〜るありあの笠

旌梢  
巾車  
枕兆  
露柱  
今周  
蒹鶉  
佳丁  
十雨  
陽秋

追善

門乃木の葉も法而し一恒  
一板子笠を朝とく人批把乃心  
笠版と汝も葉少や枯尾花  
野々枯く喬よましく笠の骨  
分卵足道と讀誦始末茶葉外  
推立女弟乃枯葉も四七品  
子向足ん初冬花乃天津星  
木の葉は依りてかゝる園地の種

倫里  
露月  
折巾  
抱風  
涼巴  
鐘山  
梢花  
林下

千鳥園 筆笠や好いらは

茂名

故の葉の著記持来分笠乃葉の種我  
遺子鑑分年ありはを志  
をそらふの小幅をいさく和記此  
白子撥下

今とそとさるや葎乃紙表具  
優勝塞よとけとて時西橋其笠  
今とそとの笠よとけとて時西橋其  
らよ月笠花染も滴くや葉水紙  
金蓋のぬ厚の白く一扇竹棚  
鴨とや望田乃紫笠花新

水先  
杜谷  
席木  
萍倫  
枕里  
菅音

追善

残るゝ木の葉乃中の音州

相州城下 白汀

木葉吹風かな松の葉の葉

沾古

木葉吹風かな松の葉の葉

素山

木葉吹風かな松の葉の葉

蘭阜

木葉吹風かな松の葉の葉

文連

木葉吹風かな松の葉の葉

信州松本 三省

木葉吹風かな松の葉の葉

秩父 観荷

風や木葉吹風かな松の葉の葉

荷香

新正一木の葉は深川の松

小松川 一之

家樂あしりかなー木の葉

調喜

あつゝ木の葉は子み松の葉

蘭秀

いづれせんつとて時分は小松の葉

白之

在りや松の葉は極や

甲州 十洲

其流波子洞はー木の葉

琴口

木の葉は先三十年の末の川

文因

松の葉は時分は松の葉

不知

松の葉は松の葉は松の葉

南花



凡一や野の栗津の本茶間の種  
其一ふも今を言はそひのあま  
余は多し推しての心なまな  
そあまといひしと由縁くまな  
其縁のそ縁あるふのそこの如  
那縁の教くせきしてあまな  
そ縁のそ縁あるふのそこの如  
前縁のそ縁あるふのそこの如  
不二門の時もあまの如き

紅葩  
貫十  
冬首  
十里  
佳丁  
茨鷄  
十雨  
山薑  
炎炎

笠 木葉

能国如菅笠之うく勢林乃風  
石切のそよよとてあまな  
那縁のそ縁あるふのそこの如  
そ縁のそ縁あるふのそこの如  
そ縁のそ縁あるふのそこの如  
そ縁のそ縁あるふのそこの如  
そ縁のそ縁あるふのそこの如  
そ縁のそ縁あるふのそこの如

吟市  
風女  
標梅  
緒松  
鐘山  
相雨  
當國  
枕翁

身一枕地藏の坐す祀り解

青葉

此馬北寺とて行ぬ一寺如

百葉

坐の坐を四鶴の坐也長慶寺

仙里

その坐を坐物なり一寺一區

帆里

雨も坐も坐は坐なり心あり

桃塘

坐をけり身一坐なり夕時白

邑倭

坐あり坐雪坐三上や大佛

桃指

おん坐先坐行一坐て本坐外

桃北

古坐とも新坐とてする本坐外

雲腹

根も坐なり坐の坐なり一り

叢夫

坐の坐や丹坐一際坐生山

一之

坐よ坐玉味坐なり朝坐坐

白之

坐坐も坐なり坐坐坐坐坐坐

蘭秀

坐坐坐坐坐坐坐坐坐坐坐

一滴

坐坐坐坐坐坐坐坐坐坐坐

古鈴

坐一坐坐坐坐坐坐坐坐坐

照仙

坐坐坐坐坐坐坐坐坐坐坐

林潭

坐坐坐坐坐坐坐坐坐坐坐

也鬼

大龍一坐坐坐坐坐坐坐坐

三省

昔中流や鍾もを乃むし一笠  
 紀山  
 梅屋や三十三の所一木葉は立  
 南川  
 十徳子所の悲際一木葉は立  
 草和  
 然とも惜しや憂をよく木葉  
 戲言  
 極るはよも憂をよく木葉は立  
 柝波  
 いし歌子木葉搔ゆ子願何如  
 茂名  
 今も世の深くを白くを秋丹  
 紅夕  
 流の靡く世の未清一蓮葉は立  
 仙杏  
 昔の如く流の白くを笠は如  
 布仙  
 是くや青葉隠道は流らと坐  
 柝翁

木葉 笠

宵はの奈と焚里の具の如  
 露人  
 石上の階のつゆ一木葉は立  
 逸志  
 散射はらるる一木葉は立  
 桐雨  
 くもは木葉子裏すたる木葉は立  
 全水  
 紅葉裏生十方夢の細代笠  
 柝條  
 坐すあすの袖を流すや樹海  
勢州山田  
 反九  
 岸の長き船は東のや枯尾也  
三洲赤坂  
 反梅  
 永名子冬に柳を携るるあす  
日  
 松豊

追福

惟其本乃象浴る古根株

佳風

桃翁(昔々)曰佳風聖遠傳の事は能徳  
弘教の事は夏柳もをりか一河高崎の  
郷降へくわや也撰者入るは今此白と  
蓮門柳も能もまよの訪あり人々也  
翁日人唐柳なりてある秋のうらまはと  
書く又秋葉のうらまはくも人翻録と  
は凡匠丈而爲百世師と云蘇氏の答るると  
しつとすとつと修せよと

道乃まよのうらまはくも人翻録と  
蘇氏の答るるとしつとすとつと修せよと

沾涼

鶴招く其まよのうらまはくも人翻録と

露牛

心地觀經 不知我身有如來

當國

詣長慶寺

湖十

湖十

澄みわたつと此凡種は本葉外 し風

法水乃法水より流る本葉外 魚路

笠の笠とれは富士の根本葉外 五百武

湖乃流や本葉外切子水 涼宇

本〜〜入お介さ塔乃裏 鉄志

赤川〜法昨記〜北島通 東岡

蕉翁の旧庵をわらふ

大橋も都の辰己忘〜中車

指折〜本葉外偈レ花の縁 山薑

閑中春

曉松記

心は賢く利か〜と心と後さ〜

後〜〜や苗代乃頃よる里谷は

〜草の古徳を便〜

水乃流も〜長軍の傍り出る軒

〜あ〜〜内子机を〜

〜披〜〜立寄〜

〜子猶園〜〜心と澄〜

あつたの満ちたあつたあつた人情を  
 離れしつゝ見ゆるも今の世に斯くも  
 清くもなる陽のこゝろと傳へていつ  
 披くも雨のこゝろの巻をすゑと我れ  
 色情は恨しきもあつたあつたあつた  
 志の魚の鳴も同じ松の音  
 雨乞とら合ふもあつたあつたあつた  
 けれりりすれりり金鳥も西へり

あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 羊頭乃公出りあつたあつたあつたあつた  
 一時は指針一生はあつたあつたあつたあつた  
 漸く星もあつたあつたあつたあつたあつた

曉松

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

三利

一年 十年 百年

批梢

宮極乃法見の庵や早苗時  
伊勢者此子控の好む花は  
花尾花 女<sup>中</sup>本高一羅漢堂

四木 楮 桑 漆 茶

批翁

緞入此の道々此の架れ花  
萬一此の虫一は一桑のみ  
侍此牌を以て里川柄抄

南都八景

南園堂藤

堂北庭菴乃積細河川

曉松

佐保川螢

磐筑

高女男堂と堂々々山保山保山

春日野鹿

千本

高女の舞家の山と山保山保山

猿澤池月

風女

月堂と山保山保山保山保山



三笠山雪

香那之伊阿弥，陶器瓦

磐筑

雲井坂雨

曉松

傘水油氣源——寺平坂

東大寺鐘

風方

多草の種播り子常陸餅

真橋行人

千本

岩を捲る松の樹水油煙取

松塗る莊子乃道也冬野笠

磐筑

庵儿五十一花の茶乃云

松翁

一以爲二重水乃講中し

和墨

浮りくを本國に封

里曉

臺中も壺持以る温純桶

秋浦

汲湯同屋の垢子くハク

和泉

去つらと海多し月白

青葉

晴籠へ流小も積る

青葉

曲直乃長小便ハ風乃萩

吟市

志も晴毎々午未申

嘆松

色付如石越ハ廊より西に里

秀翠

孤波如多も此指と厚

秋浦

身拍ハ扶杉多々松と友

嘆松

馬山何人路ハ昔朝乃反

和墨

川音乃線ハ一岸路ハ終果端

和泉

左補處ハ向公法思也

碧流

津鼓を小指ハ

里境

高ハく是乃経林以証久

専用

身源く思也同士の欄細

青葉

路流ハ彩を抱付

吹市

花也月例幣舞の

秀翠

折歌ハ芝々飄舞

桃菊

唯々風ハ聖に衆也豆腐

弄松

呂水如延作ハ一越

風女

男入り大久保小致物わい分 推翁

謙子ゆゆの唐園のあまき 東風

深丸のあまきゆき 八ノリ十六 衡 古道

伯父の傳どけく汁かき 千本

風如音をきく空更葉竹の寮 文編

追善相撲のよと告よな後 壺弦

源の串様ぬこい月乃前 千本

箸子絶の上代如惚 卷石

不汝法よの腫物の跡を押まき 東風

鯨奉りい海子毛禮 古道

饅頭以割りい伶人席をい 風如

琴塔をよる柄抄はき 陽奴

春平の多子糸科か繪書か 壺石

美月を船の陽の三才 弄和

性志ある小那羅子松乃夢 宿音

有明千里操井の过子 文編

まの浦も礎断る朋か浦へ 萍編

汐時をい 壺以 駕 桃里

や馬花く鯉ハ流ノ日北斜

物秋

澄澄ハ半ハ撥極細ハ

楓子

かたうけの首尾を白を孝也也

桃里

恋のやつくり螺貝也唯

桃山

片しつこ心経つてことごりた

萍倫

梅もろくくと出目ハ肉也

桃翁

土公ハ花中ノ遠ク燦然ハ

壺龍

五加がくくくくくハ礎

皆青

三 元法ハ花ハ瓶瓶ハと稚子也

啓史

透るる石くくくくくく

中車

天際ハ女穿人藻をせり

照仙

押手ハ三才ハ色ハみ

林源

尋ゆる雪也四石ノ葉也

南巷

駢を除るハ相師ナリ

桃拐

いづこハいづこハてあつ

東巴

紡錘ハなつこハ比翼也

桃兆

留主ハ戸ノまもり也

紅夕

蕭然ハまもりノ耳也

露柱

癡ていふも地蔵一そり

批翁

二百十日の人の食うま

東巴

おめその月栴縁に腰あ

批兆

篝おかげんす口を

南花

靈山て見の色下中納言

南柱

一々聲二御一澤浮れ

南強

川くその鑽倦くか

也免

此餅搗と鎮宅此年

照仙

高深の硝子指のあ

君山

号布一ぬく馬醫者

紅夕

三ッ撞く捨るの余慶し

巾車

吉原法なやよめ

啓史

ほめも成借して

南強

七の固乃盟夕

也危

月ハ袖を通る

林深

鯉ふ一龍方立の

批翁

花かつく葉く

批指

麻此坊

君山

名  
藝貴小空の里出る斤松篁

今次

腐どりの通してお竹大目

紀逸

燭石物あつゝの尾子尾付

當回

朝子御らん平紙おごる

枕翁

多分稿の扱ふ草や角糝

枕宇

漣の魚竿一立擢子知し

山薑

白鳥乃送うまを世紙作りの

紀逸

穿子の階子母 アキキ 嘴と吹

叢丈

月明と冠赤子残の交る帯

梅花

被北裾を二人リして秋

重山

能うんを恨む物の中付る心

葉二

使の骨紙おしむ橋臺

枕宇

一歩のい何と云ふて 燻印

山薑

剥身い志る来の下凡

茶二

いらど喰顔のうとささむら

枕翁

奇舞妓と聞くとく無垢場

今更

あし鴨の腰いとりろく真田帯

重山

毛一二尺もあつて上テ筆

當回

寺にまはるふ又ふ乃遠目鏡

叢

袖な〜好織畏り幸利

桐花

花は長十一日乃朔ほ〜花

白峰

せ〜や万所の女羨ハ美

陽秋

鳳音調

一 風子カキテ木紫カキテ奏子カキテ樂カキテ如音カキテ

批里

離宮カキテの〜カキテ香カキテ爐カキテ

背青

菓子カキテ魚子カキテ足カキテ地カキテ山カキテもカキテ梅カキテ松カキテ

萍倫

ふろ〜カキテ風カキテ後カキテ子カキテ葉カキテ如カキテ偏カキテ小カキテ

里

偏カキテ月カキテやカキテ秤カキテもカキテ女カキテのカキテ指カキテ〜カキテし

青

御カキテ〜カキテ建カキテてカキテのカキテ草カキテ如カキテ花カキテよカキテ房カキテ

偏

葉カキテのカキテ葉カキテ等カキテ〜カキテぬカキテ秋カキテ深カキテ〜

玉

鳳風カキテ紋カキテ〜カキテ指カキテ折カキテ〜カキテ如カキテ若カキテ

玉

馬カキテ二カキテ高カキテ〜カキテ媒カキテ口カキテよカキテ一カキテとカキテ高カキテ里カキテ

倫

籟カキテをカキテ吹カキテ物カキテ遠カキテ〜カキテ中カキテ

星

天カキテ〜カキテとカキテ尺カキテもカキテ同カキテくカキテ竹カキテ管カキテ堂カキテ

音

水カキテ如カキテ重カキテ〜カキテのカキテ京カキテのカキテ室カキテ如カキテ如カキテぞ

偏

智恵誠語草藝之世常務月

小島漁りて門家乃市

魚籠樽もたつて海乃小島、

入札するもぬくく 三 洪

花嫁の足量ハ籠子天守し

几中子呼く沼田明る

公奉と祝くく公守神守そ

ちよ川子系て三里迄付

法用が指力ある我ハ産

青 里 偏 青 里 偏 青 里 偏 青

新ハ寸くも方法此例

物とれハ猪力力是る衣食注

後里我る里年ハ志こし

通りそハまろく巻の物ハのそ

孫被治も鏡向子祝換

門更律候もそ切る幸きもの

無上其空新糸此世話

余不同子ハ之浦海風ハそ

肌乃志るそハ月の物ハ

青 里 偏 青 里 偏 青 里 偏 青





水一糸透魚の裏 涼守

小川一葉分をこぼるる 執筆

七親善の九葉此書也 茂名

多入の車紙絶筆一風 涼守

十三七の夕夕の紙新母 鉄志

金儲一の蘭身不可也心算 東岡

唐津此二子遊飛脚立 布仁

天香ある花の門一庫裏(遠 五郎式

松利一里鳥素体唱(四 山風

根ハ惚て法清カリの天竺合 魚路

修田此攝ハ任一の及リ 珠志

多の海とて是ハ和紙置楳也切也 涼守

多軒一草鞋出入の西行 中車

意江之子昼此狼川一色也 山風

少也此代々重焼垣此判 東岡

茂名にて後佛ハ居る方靴切 茂名

控 少くもハ白牡丹の如 魚路

ちんちん此の如くハ松紙をこぼる 五郎式

三日より此のやうに  
 さあ深くかゝる骨も老が  
 花冠ももろく飛ハ籠  
 草茎も折れ物方枯  
 美の相ハ藍花番  
 深み子合をらる日  
 園のさくらも  
 足さるの四石も  
 辛出飽ハ千鶴

深宇  
 布仙  
 茂名  
 東園  
 五百氏  
 録志  
 山凡  
 魚路  
 中東

詞 儂

今も其廣をめぬ乃置謀  
 ちんちん 朝明 柳 管  
 春風の流るる後如か  
 奇一舞子 揺る中 杉の志  
 くの如くは 朝月人 籠  
 菊ハよよよと 欄干子 腮  
 根京 宛 推量子 つか  
 下はもか 尻 何事 推  
 推付く 骨 首 何事 推

雨 橋  
 稚翁  
 啓史  
 巾車  
 陽焔  
 執毫  
 為  
 橋  
 車

有侍乃奇、合ハ其出  
 引和一言信之、語ハ如皇  
 月拭拚ハ、葵舎ハ直  
 小ら凶ヲハ、お月根ハ出ル、伝子其  
 天香酒ハ、浦ト傾城ノ供  
 物ハ、如花ハ根ハ紙費ハ  
 通具立トシテ、其ノ入  
 了ハ、心ノ門ハ、府村却此月  
 借ハ、心ノ門ハ、馬ハ、心ノ門

史 橋 為 車 史 橋 為 車 史 橋 為 車

竈一更静ハ、舞ハ上ノ如皇  
 大音園子ハ、薰ハ、其如  
 掃、船ハ、唾トシ、何トト、年ハ、不  
 与カト、交ハ、韮ハ、乃、清書  
 芦、清ハ、の、身、良、都、よ、ル、ハ、苗、其、如  
 女、其、如、神、其、如、鶴、の、お、と、り、ハ、  
 子、其、如、の、流、ハ、不、流、ハ、も、云、是、ハ、  
 出、ハ、貝、地、貝、ハ、み、お、も、の、物、ハ、  
 是、ハ、瀝、古、師、を、去、ハ、ハ、三、百、里

橋 為 車 史 橋 為 車 史 橋 為 車

お撰とくすも瘡やし地

當位いらふとと強<sup>イ</sup>き力月入

昔の公得てい如露の葉鋒

背戸に子物の下えし如<sup>イ</sup>得<sup>イ</sup>多<sup>イ</sup>物

裏一<sup>イ</sup>出<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>の素人て如<sup>イ</sup>

余もさ<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>に<sup>イ</sup>ぬ<sup>イ</sup>ぬ<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>輪<sup>イ</sup>之<sup>イ</sup>綺

那のち<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>宮<sup>イ</sup>一<sup>イ</sup>桶

袖は<sup>イ</sup>如<sup>イ</sup>白雪<sup>イ</sup>餓<sup>イ</sup>子<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>車

産<sup>イ</sup>播<sup>イ</sup>鏡<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>架<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>之<sup>イ</sup>海<sup>イ</sup>星

史車 為 史 橋 秋 車 史  
執年

動靜をいけさる如と

いも<sup>イ</sup>終<sup>イ</sup>一<sup>イ</sup>以<sup>イ</sup>障<sup>イ</sup>子<sup>イ</sup>如<sup>イ</sup>行

何<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>く<sup>イ</sup>徒<sup>イ</sup>或<sup>イ</sup>之<sup>イ</sup>京<sup>イ</sup>比

乃<sup>イ</sup>圓<sup>イ</sup>入<sup>イ</sup>も<sup>イ</sup>皆<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>之<sup>イ</sup>如<sup>イ</sup>

若<sup>イ</sup>一<sup>イ</sup>箇<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>老<sup>イ</sup>少<sup>イ</sup>何<sup>イ</sup>乃<sup>イ</sup>流<sup>イ</sup>

流<sup>イ</sup>面<sup>イ</sup>少<sup>イ</sup>如<sup>イ</sup>并<sup>イ</sup>も<sup>イ</sup>記<sup>イ</sup>書<sup>イ</sup>下<sup>イ</sup>

今<sup>イ</sup>不<sup>イ</sup>満<sup>イ</sup>了<sup>イ</sup>之<sup>イ</sup>十<sup>イ</sup>三<sup>イ</sup>回<sup>イ</sup>到<sup>イ</sup>如<sup>イ</sup>

ふれ合ひ地をぬきてはけり  
尋ねれば高き山ありて  
五つふりて山をくぐりて  
にありてふりて山をくぐりて  
一書しければ山をくぐりて  
了遠く山をくぐりて



了  
了

